

ピースリーディング

『うつし世は夢』

夜の夢こそまこと』

作……佐藤茂紀

配役

教師1……………
明智小五郎……………
乱歩A……………
乱歩B……………
怪人二十面相……………
少年1／篠崎……………
少年2／桂……………
少年3／中野……………
少年4／野呂……………
少年5／井上……………
小林少年／少年憲兵……………
少女1／少年憲兵……………
少女2／少年憲兵……………
少女3／少年憲兵……………
少女4／少年憲兵……………
少女5／少年憲兵……………
父兄1……………
父兄2……………
父兄3……………

女教頭……………
校長……………
教師2……………
教師3……………
教師4……………
教師5……………
教師6……………
紋子……………
紋子の義母・阿部さん……………
紋子の友人・奈緒……………
近所のおばちゃんの加藤さん……………
近所のおばちゃんの佐川さん……………
近所のおばちゃんの高田さん……………
近所のおばちゃんの中山さん……………
近所のおばちゃんの原田さん……………
近所のおばちゃんの真島さん……………
収集車の男1……………
収集車の男2……………

プロローグ

女性たちがやさしく歌う「故郷の空」が聴こえて来る。

夕空晴れて秋風吹き

月影落ちて鈴虫鳴く

思へば遠し故郷の空

ああ、我が父母いかにおはす

*セリフの間は何度もリフレインされる。

教師1

僕は高校の教師だった。いや今もそうだろう。とは思う。

僕はよく思い出す。夕暮れの教室の風景を。

生徒たちとともに芝居の稽古をしていると、彼らの横顔が夕日に染まる。

あの時僕は確かに幸せだった。この世界では5年の月日が流れたらしい。

でも僕にはそれが信じられないのだ。

僕はきつとあの時、生徒たちの稽古を眺めながらうつらうつらと眠りこけたに違いないのだ。

だから・・・あの風景の中で、目が覚めるはずなのだ。

きつと、あの風景の中で。

夕暮れの光が教師1を包み込み

「故郷の空」の『ああ、我が父母いかにおはす』のフレーズが大きく歌われ、暗転。

第一場 2016年3月29日 日本が戦争のできる国になった日

教師 1

とある福島県内の高校の正門

朝のホームルームまであと35分 時刻で言えば午前8時00分

空がずんずんと暗くなり、ちらほらと雪が舞い始めている。

登校してくる高校生たち。

そこに教師5がやってくる。

特に名前は必要ない。互いに先生と呼びあえばそれでいいからだ。

少年 1

先生おはようございます。

教師 1

おはよう。

少女 1

おはようございます。

教師 1

僕は高校の教員だ。毎朝正門で、生徒たちにおはようと挨拶を交わす。

少女 2

これは、そういう係としてしているわけではない。したいからしているのだ。

教師 1

御早うございます！おつとめご苦労さんです！

少女 2

おはよう。

教師 1

・・・。

少年 2

挨拶を返さない生徒もいる。それもあたりだ。問題だと騒ぎ立てる気はない。

教師 1

おつす！先生！

教師 5

おつす！桂くん。

少年 2

おい桂！髪の毛少し茶色いぞ！

教師 1

地毛です。地毛、地毛申請出してます。

教師 5

僕自身はあまり気がつかないのだが、この先生はそういうことによく気がつく。

教師 1

先生、桂、最近調子に乗ってきたと思いませんか。

教師 1

なにがです。

教師 5

言うこと聞かなくなってきたんですよ。

教師 1

ほら髪の毛のことにしたって顔見るたびにイライラしますよ。ねえ、先生。そんなあなたに対してイライラします。

教師 5

先生、今何か言いました？

教師 1

いえ、なにも。

少年 3

おはようございます！

少女 3

おはよう、せんせい♡

教師 5

おい！お前、髪、また赤くなってきたぞ。

少女 3

だって

教師 5

だってじゃない、こないだちゃんと黒くしてきたのに反省してないのか。

少女 3

そんなんじゃないです。染めれば染めるほど、すぐに色落ちて赤くなるんです。

教師 5

反抗するの？

少年 3

俺、先に行ってるね。

少女 3

ちよつとなにそれ。

教師 1

あの、嘘は言っていないと思いますよ。

生徒たちが周囲に集まりだす。

教師 5

先生、指導の一貫性を計れなくなります。

少女 3

ああ、なんかもう最悪。

教師 5

お前、後で職員室まで来なさい。

少女 3

なんでえ、やだあ

教師 5

いいか、学校は集団生活なんだぞ、個人の我が儘が通るところじゃない。

少女 3

わがままなんて言っていない。

教師 1

あとで、職員室に来なさい。そこでちゃんと話すといい。

少女 3

でも

教師 1
少女 3
まずはホームルームに行きなさい。
はい。

少女 3 は、教師 1 と教師 5 の顔を見比べながら、納得していないと表情で訴え、生徒昇降口の方へと向かう。

教師 5
ほら、お前たちも教室に行きなさい。

先ほどまでのやり取りを遠巻きで眺めていた生徒たちも動き出す。

教師 5
他の生徒へのしめしがつかないですよ。

教師 1
真面目なんだよな。

教師 5
いや、あの生徒は決して真面目とは言えませんね。

教師 1
いいえ、先生のことです。

教師 5
へえ、意外だなあ、先生に褒めていただけのなんて。いやあ、真面目が一番ですよ。

お互いに学校のために頑張りましょう。あ、おい、その、そうお前、スカート短いぞ。

教師 5 はなぜかなんだかうれしそうに、次の生徒を注意しに行く。

教師 1
いつもの日常だ。だがいつもより心ががさつく。今朝の悪い夢見のせいかもしれない。

相変わらずの学校の持つ全体主義的側面に辟易しているせいかな。

それとも安保健制なるものが施行される日であるせいかな。

あの江戸川乱歩が福島県に疎開していたなんて話を聞いたせいかな。

まあ、いろいろだ。5年前のあの日のことを思い出していた。

第二場 2011年3月15日 毒が飛んできた日

とある福島県内の高校の正門

合格発表まであと1時間

時刻で言えば午前11時00分

空がずんずんと暗くなり、ちらほらと雪が舞い始めている。

少しづつ受験生たちが集まってきている。

彼らはほぼ一様にマスク、帽子、コートを着用している。

政府広報で出された外出時の服装例に従っている。

少女1
こんにちは。

教師1
こんにちは。あ、マスク外さなくていいですよ。

少女1
え？

と、不思議そうにマスクを外す。

教師1
そのまま、マスク、あ、コートも脱がなくていいから

少女1
いいえ、ちゃんとします。

少年1
こんにちは。

教師1
あ、君もマスク外さないで

少年1と少女1は、なぜこの人はそんなことを言うのだろうというような表情で、
正門をくぐっていく。

教師1
みんないいかい、外さなくていいんだ、マスクもコートも手袋も

少年たち
教師1
こんにちは！
みんな、そのまま進んで、コート着たままで。雪降ってるしほら

雪が強く降り始めている。西からの風が雪と得体の知れないものを運んできている。

少女たち
教師1
こんにちは。

教師1
マスクつけたままでいいから

少女2
少年たち
こんにちは！

教師1
帽子もぬがなくていいから、そのまま

少年2
父兄1
挨拶の時は帽子を取るんです。ちゃんとしなさいって言われています。

父兄1
教師1
こちらの学校の先生ですか。合格しましたらお世話になります。

教師1
父兄2
あ、はい。あの

父兄2
父兄3
あの、子供達を不安にさせないでください。

父兄3
教師1
こういう時はきちんとさせなければと思っております。

教師1
少女3
そんなこと、今は・・・

少女3
少年3
こんにちは。

少年3
少女4
こんにちは。

少女4
少年4
こんにちは。

少年4
少年5
こんにちは。

少年5
少年少女たち
ちゃんとしています。ちゃんとしています。

教師2
教師1
先生、正門のところに変な先生がいるっていうから来てみたら、やっぱり先生ですか。

教師1
教師2
ああ、先生、子供達がしてきたマスクをここでとって入っていくんだ。

教師2
教師1
したままでいいといっても、ていねいに外していくんだ。

教師1
教師2
あたりまえですよ。

教師2
教師1
あたりまえ？

教師1

教師 2
そういう風にしろと中学校でも指導されてきてるはずですから。

教師 1
だけど、時と場合ってのがあってしょうが

少女 5
おはようございます。

教師 1
おはようございます。マスクは

少女 5
自転車はどこに停めたらいいですか。

教師 2
あ、あそこの体育館の南側に停めてください。

少女 5
ありがとうございます！

教師 1
マスク、マスクは外さないでいいからね。

少女 5
正門を通る時は身だしなみを整えて、と言われてますから。ああ、すみません、

もう通ってしまっているのにすみません。

いや、いいんだよ、心配しないで、

はい！発表見に行つてきます！

少女はぺこりと頭を下げ、発表会場の方へと元気に歩いて行った。

見ていると、歩きながら、マスクを取りコートのポケットにしまい、コートを脱いだ。

雪がよりつよく吹きつけ始めた。

教師 2
そういう先生こそ、全身びしょ濡れですよ。無理にコート脱いでいないで着た方がいいですよ。

風邪と放射能の両方にやられますよ。

時は遡って午前8時35分。

ここは職員室、朝の朝礼直後。合格発表の仕方に意見が分かれていた。

教師 5
屋外でやらないという決定なんだからそれでやりましょう、ねえ教頭先生。

教頭
とにかくです。本庁の方もその件に関してそのように対応した。

それが、今私たちにできうる対応の全てです。

教師5 先生はこれ以上何をしろというのですか。テレビでも広報したでしょ。
ねえ、先生方。私たちは管理職の判断に従うだけ。
教師1 確かにインターネットでも、合否を確認できるようにはしてくれました。
教師1 ですから、あなたも昨日から大騒ぎして、望んだことが、そうなったのです。
なにか気に入らないんです。
教師1 インターネットでも、です。ネットでも、でも、ですよ。
教頭 本校としても、独自に、電話でも、確認できるように整えました。
教師1 そんなこといつてるんじゃないです。受験生たちは結果集まってきましたよ。
教師1 この状況下でみすみす被ばくさせるために集めるようなものじゃないですか。
教師2 先生、そのくらいに
教師1 ここから5キロ離れた安積町あさかまちの工場のガイガーカウンターが100マイクロシーベルトを
超える数値を記録したらしいじゃないですか。ここだって
教師4 デマじゃないんですか。
教師1 こういふときだからこそリテラシーを持って情報の選択をするべきですよ。
教師3 情報そのものがないじゃないですか。だから最大限の
教師1 最大限、子供たちを守ることを優先させるべきです。
教頭 先生。
教師4 先生、あなたは出所も分からない情報に振り回されて本筋を見失っているんじゃないの。
教師5 昨日、あなたに飲まされたインジンうがい薬。デマだそうじゃないですか。
教師1 ひえええ、あの話に乗ったんですか。おどろき。
教師5 わたしらは国の判断、県の判断に従ってれば間違いないの。
教師1 自分の責任にはならないってだけでしょ。
教師5 聞き捨てならないな。
教師2 まあまあ、こういうときですから。
教師1 こういふときだからこそ、現場の判断が大事です。
教師1 ですから、いまからでも遅くないです。校長先生！もう一度県に働きかけて

教師3
校長
私もそう思います。先生たちも避難されている方も多い状況です。こんな時に先生方、私もね、戸惑ってはいるんだ。

教師1
校長
反対はしたんだぞ、学校再開はもう少し時間を置いてつてな。昨日話した通りにだよ。だったらなぜ。

教師1
校長
県としてもな、明るい前向きな動きが欲しいということだ。
なんのために！

教師2
教師1
それでマスクも来てるんですね。
しようがないでしょ、私たちは公務員、上からの指示に従わなければならないの。

教師2
教師5
そんなこともわからないの。
でもですね、現場の判断というのも大切なんじゃないでしょうか。

教師5
教師1
ねえ先生、聞くけど、今までも現場の声なんて通ったことがあったかい。
もういい加減にしてくれない。インターネットも使える。電話も使える。対策は取られたわよ。

教師1
教師1
そんなのただのアリバイでしょう。
あなたね、少しは協調性を持って仕事に当たってください。

教師1
教師5
ちよっと待ってください。話をすり替えないでください。
先生、ちよつといい、教頭先生だってお立場がおりになるんだ。

教師1
校長
苦しまれた上での話だと僕らは理解して仕事をしようじゃないか。
はあ！？あんたのは同調っていうんだ。

校長
いいかよく覚えとけよ筋肉バカ、協調するのと同調するのは違うんだぞ！
みなさん、落ち着いてください。ともあれ受験生たちを迎える時間が迫ってます。

教師1
校長
今できる最大限でまいりましょう。
であれば

校長
教師2
あとで校長室でお話ししましょう。
とりあえず、昨日の提案で発表会場も屋外から体育館に変わったことですし、準備に入りましょう。

校長
皆さんの気持ちはしっかりと受け止める。

そこに理科の教員が古いガイガーカウンターを持って入ってくる。

教師 6

校長先生、学校にある実験用のガイガーカウンターは故障してますね。

校長

そうですね、根拠になるものは示せないね。

教師 1

校長先生……。

そうして、合格発表は予定通り行われることになった。

学校への電話での問い合わせ1件。

その1名を除く受験生はなんとか学校にたどり着いた。雪が強く降っていた。

西からの風が雪と得体の知れないものを運んできていた。

少女 5

私が震災にあったのは、中学校卒業式の日でした。

その何日か後、原発が爆発した後に合格発表がありました。

両親とは別に暮らしていたので、自転車で合格発表を見に行くしか方法はありませんでした。

その日は天気が悪くて雨や雪が降ってました。私はすっかり濡れて帰ってきました。

私はやっぱり怖かったので帰ってからすぐにお風呂に入りました。

でも、あの時放射能をいっぱい浴びたのかと思うと今でも怖くなります。

ホールボディカウンターも甲状腺の検査もとりあえずは何も異常は見られませんでしたが、

でも、やっぱり今、甲状腺に放射能がたまってるのではとふと思うことがあります。

それから、最近バイト中のぼせて鼻血がでたのですが、もしかして、と少し思いました。

それから、友達も最近鼻血がでたという話を聞いて、そんなところで共通したくなかったなと思

思いました。

そして、これから結婚して赤ちゃんを産むことですが、あの時浴びた放射能か、今も浴びているか

もしれない放射能で、やっぱり奇形児だとか障害を持って産まれてくるのではと思ってしまいます。

私はお付き合いしている人がいますが、その人も同い年で福島で同じ震災にあっています。

今は東京にいますが。

こんなことは思いたくないけれど、福島で放射能を浴びてない人と結婚した方が障害のある子を産む確率が少ないんじゃないかと「度思ってしまったときがありました。すぐに後悔しました。今ではそんな風には思いません。」

もしかしたら、イメージできていないだけかもしれませんが、そのときにならないと分からないという諦めがあります。

私は誰かに怒ったりイライラしたりすると罪悪感で結局自分が苦しくなります。できるだけ穏やかでありたいと思います。

だから、子供が原発のせいでは何か障害をもつのは子供にとって生きにくいことだけど生まれてきたのならその子供が生きられるように守りたいと思います。

それか障害をもつて生まれてくるはずがないと信じたくて、自分の中で合理化しているだけかもしれません。

少しぐちゃぐちゃしてて、逃げたいと考えたくない、そのときはそのときだと思えます。

あとは、もし自分が他県に就職したとして、福島⇨放射能と思って跳ね返してくる人がいたら、とても悲しいと思います。

とりあえず出身は無理に聞かないし（聞けば多分あなたは？と返されるだろうから）

聞かれなければ自分から言うこともしないのかなと思います。私も忘れたいのかもしれません。放射能のことを気にしないで放射能っていうレンズを通さないで考えていきたいし、接して欲しいです。

福島県郡山市内の住宅地。隣接して被災者用仮設住宅群がある。

その境界線付近にあるゴミの集積所。

ゴミ収集車のエンジン音、回転プレス板が放り込まれたゴミを押し潰す音が聞こえる。暗闇の中。

収集車の男1 よし、完了！次行くぞ！

収集車の男2 ああ、ちょっと待ってください。あ、あの、そのゴミは持っていかなくってもいいんですか？

加藤さん それは置いといてちょうだい。

走り去る収集車のエンジン音とともに明転。

するとそこには一つのゴミ袋を左手に提げたままの紋子。

その周囲に主婦連が集まっている。

加藤さん

だれだかはわかってんだげど。

原田さん しつかりと心からごめんなさいって言ってもらわないとねえ。

うなずく主婦連。うつむく紋子。

奈緒

なんどもあやまつてるじゃないですか。

高田さん

あゝあ、しかもプラスチックゴミも混じってるし。

原田さん

そもそもそういう基本的なルールも守れてませんし

奈緒

あの、すみません、そういう感じのやめませんか。

中山さん

どういふ感じ。

高田さん
佐川さん

あのね、
気持ちの問題だと思っんですけど。

大きくうなずく主婦連。
ゆつくりと主婦連を見渡す紋子。

真島さん

どうしたんですか、みなさんお集まりで。

加藤さん

どうもこうもないですよ。この包み、このゴミの中にあつたんだわい。

中山さん

加藤さんがご近所におすそ分けしてくっちゃタラの芽をごっそり捨てた人がいるんだわ。

佐川さん

わざわざ加藤さんが皆さんにつて

中山さん

ええ、あのタラの芽ですよ。

加藤さん

いや、いいんですよ。お口に合わなかったんでしようから。

佐川さん

わざわざ。ねえ。

高田さん

何年経つたと思ってるの。どうせあれでしょ。

真島さん

わたし、おいしくいただきましたよ。

奈緒

紋子さん、気にすることないよ。

佐川さん

あなたね、これはね、気持ちの問題なの。せっかくいただいたものをそのまま捨てちゃったのよ。

真島さん

それはいけませんねえ。

さらに大きくうなずく主婦連。

主婦連を睨みつける紋子。

原田さん

あれま、睨まれてもねえ。

奈緒

あの、確かにいただいたものを捨てたことはよくないとは思いますが。ですが

高田さん

ですが、なんですか。

奈緒

あのころ、みなさんも気をつけていたはずじゃないですか。放射能あるから食べないって

中山さん

ちよつと失礼じゃない。

加藤さん

だったら受け取らなければ良かっただけじゃないの。放射能は食べませんってねえ。

真島さん

十分に時は流れました。もういいじゃないですか。

奈緒

なにがもういいんですか。現にまだホットスポットだらけじゃないですか。

紋子

奈緒さん、もういいよ。ありがとうございます。

奈緒

よくないでしょう。

紋子

たらの芽、ありがとうございます。たぶん食べても大丈夫なのかもしれません。

でもだれも大丈夫だって言い切ってくれる人はいません。ただ、そういう雰囲気、気分？

そう、そういう空気に包まれているだけ。

佐川さん

あなた、何言ってるかわからないけど、その空気に逆らってるつもり？

紋子

あることが起きなければ私もおそらく、こんなことはしなかったはずです。

私、赤ちゃんを授かったんです。

奈緒

紋子さん、それほんと？おめでどう。

紋子

めでたいのかな。だってこの子はきつとこんな空気の中で生きていくのよ。

こんな空気の底で生きてかなきゃならないのよ。たぶん。

中山さん

そんな空気どこにもないと思いますよ。

真島さん

このたらの芽は私が頂いて参ります。せっかくのご好意ですもの。

奈緒

ちよつと皆さん、話し、きいてください。

紋子

いいから、こんな空気の中で子供が育っていくのなんてやだ……。

そこに慌てた様子で阿部さん（紋子の義理の母）がやってくる。

阿部さん

あ、あの、皆さん、なにかうちの嫁がご迷惑をおかけしたそうで、申し訳ありません。

紋子

お義母さん、私は

阿部さん

紋子さん、私が一緒に謝りますから、あなたも。

紋子

お義母さん！私、嫌です！

♪若い血潮の子科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ 飛ぶ
霞ヶ浦にや
でっかい希望の雲が湧く

主婦連と阿部さん、歌を歌い出す。
立ち尽くす紋子と奈緒。

「隣組」

とんとん とんからりと 隣組

格子を開ければ 顔なじみ

廻して頂戴 回覧板

知らせられたり 知らせたり

第四場 疎開先の乱歩の家にて、乱歩斯く語れり

教師 1

2016年3月29日安保法制施行。我が国は戦争が出来る国になった。

その晩、僕は夢を見た。僕は乱歩であり、明智であり、二十面相だった。

乱歩を少年たちが取り囲んでいる。少年たちは軍服をまとい、厳しい表情だが、幼さは拭えない。

今まで出会ってきた卒業生たちの顔にも思える。彼らは軍歌を歌い続ける。そんな夢を見た。

乱歩 A

帰りたまえ！ 帰っていたらどうか。

僕はねあなた方がなんと言おうとペン部隊なんぞに従軍する気はさらさらないと申し上げている。

まして少年探偵の連載を続ける気にはなれないね。

僕が江戸川乱歩である限りはね、書きたいものを書きたいのだ。

ニンゲンをニンゲンとして描きたいのだよ。

国家総動員法第二十条 政府は、戦争時に国家総動員上必要な時は、勅令によって新聞紙その他の出版物の掲載について制限または禁止をすることができる。

身勝手に法律を作って、僕のあの作品を発禁処分にした諸君らにはわからないだろうね。

乱歩 A

少年憲兵

♪若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ 飛ぶ
霞ヶ浦にや
でっかい希望の雲が湧く

乱歩 B

乱歩 A

乱歩 B

乱歩 A

乱歩 B

乱歩 A

乱歩 B

少年憲兵

乱歩 A

乱歩 B

歌うのをやめたまえ。

ああそうとも「芋虫」だよ。戦いで手足をもぎり取られたニンゲンを描いただけだ。歌うのをやめろと言っているのだ。

イデオロギー？そんなんじゃない。反戦を描いたつもりもない。ニンゲンの存在そのものの謎に僕は惹かれてあれを書いたのだよ。

つまりは偶然、それが最もニンゲンの悲惨を描くのに好都合であっただけだよ。

ただ、戦争を美しく飾ろうとしている君たちにとっては好都合ではなかったというわけだ。まあ、ちよつと想像してみれば戦争するのはそんな美しいものではないと思うね。君たちはその素っ頓狂な歌を歌いながら死んでいけると本当に思っているのかい。無理だね、こんな歌を歌いながら人は死ねない。

まさにニンゲンがニンゲンであることを拒否した歌だよ。想像力の欠如だ。

君たちは僕の少年探偵団を読んで大きくなったと言ったね。それでも書けというのか。

少年探偵が敵地に行く話を。書いてもいいが全員戦死してしまうかもしれないよ。

知恵や推理合戦でそいつは参ったと潔く負けを認めてくれる二十面相のような敵ではない。明智も助けに行けない最前線で、無線機も役立たず、無残に殺されていく少年探偵たちを描いてやろうじゃないか。

だけど、残念ながら僕にはできない。

それはなぜかといえね、僕はあの少年たちを愛しているんだよ。心から愛しているんだよ。だからね彼らが喜んで出征していくような話なんてごめんだよ。

第一条 本法律において国家総動員とは、戦争時（戦争に準ずる事変も含む）に際して、国防目的の達成のため国の全力を最も有効に發揮できるような人的、物的資源を統制し運用することをいう。ふははははは、戦争に備え、国の経済や国民生活をすべて統制できる権限を政府に与えた悪法だ。

小さな声は大きな声にかき消されていくのか。さあ、僕を逮捕するならすばいよ。

小説家は嘘を書くのが仕事だけれど、偽のニンゲンを嘘で作りに出すのはできないのさ。そして殴ったり蹴ったりナマ爪をペンチで引き抜いたりしてみればいい。

国が行えばそれが正義だ。どうした、歌が止んだね。

♪若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ 飛ぶ
霞ヶ浦にや
でっかい希望の雲が湧く

再び歌い出す。

乱歩 A

はあ、僕が国策小説も書いたろうって、その貢献があるからこうして説得してるって。それは「偉大なる夢」という小説のことかな。

強大な力を持つ最新兵器の秘密を巡ってアメリカと情報戦を展開し我が方が勝つという話だね。

(大きな拍手が起こる)

ああ、ありがとう。

だがね、あの話に僕はちよつとしたトリックを仕込んだのだよ。

アメリカの偉い人同士が日本のことを話している場面がある。

試しに主語を全部日本人に置き換えて読んでごらん。あつと驚くこと請け負いだ。

乱歩 B

待った。僕は今重大なことに再び気がついた。

僕がさも得意げにあの小説のトリックを話してみたところで、読んだ君たちは最前線の兵隊として今ここにいる。

ダメじゃないか、要するに僕は君たちを戦争に駆り立てる仕事をしたということじゃないか。

結局、中途半端な抗いは意味をなしてなかったということか。

直接的な「芋虫」を排除したお偉いさんたちを謀ってやろうとしたいたずらさえもこうして君たちのようなものたちを生んだ。

あゝ、すまない。頼む、頼みますから。彼らを殺させないでください。

小林君、あゝ小林君、君だったのか。

少年憲兵の一人を抱き寄せ

乱歩 B

今までどこに行つてたんだい。どれだけ探したことか。僕はね、君のことが可愛くて仕方がないのだよ。通俗的な言い方をすれば君を愛しているのだ。そんな君が戦争などで肉片となるのは耐えられないのだよ。どうしたなぜ黙っている。なぜいつものように僕を抱きしめないのだ。

少年憲兵、乱歩を突き放し、軍刀を抜き、突きつける。

少年憲兵

ウフフフ。うつし世は夢 夜の夢こそまこと。

少年憲兵、乱歩を斬る。

乱歩 A

少年憲兵

小林くん……。僕を、僕を殺すのだね……。乱歩先生。これでご満足でしょう。僕もあなたを愛しています。明智先生を愛するのと同じくらい。そりやそうでしょう。僕はあなたの創造物だ。あなたがそう書けば僕はあなたを愛するのです。あなたを愛する気持ちに一点の曇りもない。だから

少年憲兵、斬り払う。

少年憲兵

先生が僕らを守ろうと、僕らを文字にしなくなったとしても、僕らは死ぬのです。きっと戦争に行つて肉片となるのです。あなたが与えてくれた真つ赤な正義の血潮は南方のジャングルを真つ赤に染めるのです。きっと先生は嘆くでしょう。きっと先生は悲しむでしょう。きっと……あなたは狂うでしょう。先生が僕らの肉片を見たくないのと同じように、僕もそんな先生を見たくないのです。だって僕らが先生を裏切つたみたいになるでしょう。しょうがないのです。僕らはきっと抗えないのです。僕らは出征するのです。

少年憲兵は、何度も斬り払う。
乱歩は語り続ける。少年兵は斬り続ける。

乱歩 B

君らを殺させないでください。殺したくなどはないのですよ。
お国のために、お国のために、君らに集団殺人の片棒を担いでほしくはないのです。
B D バツヂを菊の御紋に付け替えるなんてことを僕はできない。
あゝ、小林君。

少年憲兵は立ったまま絶命しているであろう乱歩を抱きしめる。

少年憲兵

先生、文学で僕らを救えないと思われたのでしよう。
だから僕らの話を書こうとしなかった。いつの世も一緒です。
都合のいい話だけが求められるのです。先生が書かなくとも誰かが書くのです。
ええ、僕たちは死にます。
ですが、先生が写し取った嘘の鏡の中のみ僕らは生き続けるでしよう。
あなたが書けないというのであれば、この悲惨は繰り返されるのです。
それでも僕は書けない……。僕の本の中で君たちを、君を殺せない。
愛しているのだ、君たちを。
ええ、僕もあなたを愛しております。

乱歩 A

少年憲兵

刺し貫く音。

少年たち、高らかに太平洋行進曲を歌いながら二人の周りを行進する中、少年憲兵の慟哭。
だんだんと暗くなる。

第五場 声の届かない教室

少年たちと教師1がいる。ここでは遠藤平吉という名で。
(女性たちは歌を口ずさむ。)

「故郷の空」

夕空晴れて秋風吹き

月影落ちて鈴虫鳴く

思へば遠し故郷の空

ああ、我が父母いかにおはす

澄行く水に秋萩たれ

玉なす露は、ススキに満つ

思へば似たり、故郷の野邊

ああわが弟妹(はらから)たれと遊ぶ

篠崎

起立！礼！着席！

遠藤

おはよう。

少年たち

おはようございます！

遠藤

みんないるな。

小林

先生、井上君がまだです！

遠藤

井上君は今日も遅刻ですか。

野呂

3日連続遅刻です！

井上、駆け込んでくる。

井上 お、おはようございます、であります！

井上君、僕は心配だ。君のことはことさらにな。

え。遠藤先生、もうしわけね。

お前たちが兵隊さんになったらな、方言使つてるとばかにされんだ。

申す訳ありません、つうんだ。

せんせ、せんせもなまってる。

そうか？僕も

もうすわけね。

(笑う)

今日は授業を始める前に君たちに伝えなければならぬことがある。

僕もいよいよお国の役に立つ時が来た。

赤紙きたんだか。

ああ。赤紙をいただいた。

先生、おめでとうございます。

おめでとうございます！

先生、いつ行くんだ？

明日の朝、出発する。

明日！？

どこの部隊に？

まずは会津に向かう。

んだらちかくてよかったな。

ばかだな、東北の人たちは会津に一旦集められんだ。

そっからあっちこっちの最前線に行かされんだ。

東北出身者は激戦地に行くつちゆうのは本当なんだべか。

井上 遠藤 井上 遠藤 井上 遠藤 篠崎 遠藤 野呂 少年たち 遠藤 井上 小林 全員 桂 遠藤 中野 篠崎 遠藤 野呂 中野 野呂

井上 どうしても行くのが

篠崎 君たち、に惑わされるな。お祝いの日だ。先生、この度は御めでとうございます。ありがたい。お前たちの命を守るためしつかり戦ってくる覚悟だ。

遠藤 行かなきゃなんねえのが

井上 お国のためだ。お前たちの家族のためだ。

遠藤 先生、自分たちも後に続きます。

桂 先生、絶対に死んだりしねえでくいよ。

野呂 先生、そんなこと言っちゃダメだよ。

中野 野呂君、そんなこと言っちゃダメだよ。

野呂 だってよお。

遠藤 野呂君、僕はね、これから会ったこともない、言葉を交わしたこともない、

野呂 そんな人を殺しに行くのですよ。

遠藤 アメリカ兵は鬼畜生なんだべ、どんどん殺してきてくいよ。

篠崎 あったこともないその人は、僕の様を描いて、リルケに涙する、そんな人かもしれない。

遠藤 僕はお国のためにそんな人を殺すのですよ。

篠崎 先生、そんなこと言ったら非国民ですよ。

桂 国民にあらずか、だがたとえ戦場にあつても僕は人間ではありたいと思うのだ。僕は戦争に行く。

野呂 だが僕が戦争に行くということこれが果たして正しいのか君たちには考えてほしいのだ。

井上 様々に言われて学んできたことを疑うのも必要なんだよ。

篠崎 何を先生がおっしゃってるのか僕にはわかりません。僕は予科練を受けようと思ってます。

遠藤 俺もだ。

井上 ぼ、僕もた、た、戦うぞ！

篠崎 お国のために、そう教えてくれたのは先生です。

中野 今、その選択肢しかないじゃないですか。

小林 僕たちはみんなで志願することに決めたんです。なあみんな！

少年たち 君も行くなら僕も行く、一億玉砕火の玉だ！

遠藤 疑うんだ。

♪若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ 飛ぶ
霞ヶ浦にや
でっかい希望の雲が湧く

中野
少年たち

疑ってますよ。でもどうしろっておっしゃるのですか。先生！
撃ちてしやまむ！

少年たち一斉に敬礼。

万歳三唱。「大日本帝国万歳」

暗転し歌が大きく歌われ、

明転

二十面相と表記しながらも遠藤平吉としての台詞となる。

野呂
井上
篠崎
中野
桂
井上
少年たち
二十面相

先生はその次の日万歳に送られて出征した。

僕らは駅で先生を見送った。

先生は半年後、白い小さな箱に入って帰ってこられたと聞いた。

名譽の戦死を遂げたと聞いた。

そして僕らも戦場にいた。

僕らは戦場にいた。

戦場にいた！

僕は、人を殺した。皆を守るために戦争に行ったのだと言い聞かせて戦場を這い回ったのだ。

きちんと疑うべきだった。彼らは鬼畜などではなかった。

僕は君たちが戦争に行くことを否定しなかった。

少なからず、日本が向かう先に未来を信じてもいたからでもある。すまなかった。

教壇に立つものの言葉は大きかった。結果、僕は君たちの命をも奪ったのだ。

♪夕空晴れて秋風吹き
月影落ちて鈴虫鳴く
思へば遠し故郷の空
ああ、我が父母いかにおはす

座り込む少年たち、「故郷の空」を静かに歌い続ける。

二十面相 中野、おい、井上、桂、野呂・・・。すまない、やはり僕は

中野 ええ、先生のせいですよ。僕らは先生の後に続けました。

二十面相 すまない。

井上 違う。僕らは行かなきゃならなかったんだ。

野呂 一億玉砕火の玉だ！そして僕らは少国民だったもの。

二十面相 僕は否定しきれなかった。

中野 しょうがなかったのですよ。

小林 わかっていても戦争をすることを誰も疑えなかった。気分は戦争だったのですから。

紋子 気分・・・

菜緒 何も変わらないね。今も昔も、気分には逆らえなくなっちゃう。

二十面相 僕の犯した大きな罪。自分が死ぬことではなくて、教育によって子供を殺したこと。

少年たち あの気分を疑いきれなかったこと。

僕たちは共に最後の出撃をした。

編隊飛行、そして体当たり攻撃。体で表現する。

紋子 東シナ海海上、連合艦隊集結地点。

1機の先導機、4機の僚機とともに、曳航弾や銃弾が空を切り裂く音が響き渡るなか、敵空母に突っ込んでいった。

(**のセリフは繰り返される。)

野呂

ごまかしきれなくなってきました。

花が咲いたり散ったりする様に戻ってくるのは記憶です。

井上

おかあさん、行ってきます。お母さん、行ってきます……

小林

死ぬのは怖くないですか。

中野

怖いですが、どこの誰かも分からない人のために死んでいくのは怖いです。

桂

夕空晴れて秋風吹き……死んでいくのは怖いです。

桂

全長8.94メートル、最大時速約590km、20.0ミリ機関砲2門、

野呂

12.7ミリ機関銃2挺装備液冷式の新鋭機、隼……

篠崎

花が咲いて、散って、花が咲いて、散って……

少年たち

ただただ、あなたのことを想って飛び立ちます……

うおおおおおおお！

菜緒

1分後、先導機によって、一通の戦果報告が、天城基地に伝えられた。

中野

イノウエ、カツラ、ナカノ、ノロキ テキコウクウボカンヘノ トツケキヲカンコウセリ

井上

メイヨノセンシヲ トケル

中野

どっか……ん！

井上

まいったなあ。やっぱり木っ端微塵だった。僕。

桂

やっぱり？

中野

俺、海に落ちてた……。どぼん。

井上

お母さん……

野呂

僕も、最期にかあちゃんって言ったのか。

桂

なあ、突っ込む前、天皇陛下万歳って言った人。

小林

あ、はい……

桂

ひとりだけ？

小林

みんなは？

中野

言えなかったわ。僕、咲子……ってさけんでたわ。

野呂 おまえ、俺の妹だぞ。

中野 ああ、悪い、こつそりおつきあいしてました。お兄様。

野呂 なんだって、まだ13歳だったんだぞ！おかしなこととしてねえだろうな。

中野 ちよつとだけ。

野呂 このやろう！

井上 ぼ、僕は、おかあさん、また会いたい！って叫んでた。

桂 俺も。母上って、かっこわるいよね。

篠崎 小林君以外なんかみんなかっこわるかったんだね。

小林 俺、両親いなかっただじゃないか。だから・・・。顔も名前も知らないから、呼べなかつたよ。

井上 知らなくてもお母さんって呼べばよかつたんだよ。

桂 でもかっこわるいね。最期。あんなはずじゃなかつたんだけどね。

井上 先生、僕、木っ端みじんになつちやつたんだけど、敵艦の人も木っ端みじんになつちやつたんだ。

篠崎 僕もアメリカ人、最期に見えたんだ。化け物じゃなかつた。僕を怖がってた。

桂 だから言えなくなつちやつた。天皇陛下万歳って。

桂 僕らはみんな人殺し。お母さんなんて呼んじゃダメだった。

二十面相 特攻は悲劇だ。自分が死んで何かをやり遂げるということは美化できる、美化される。

井上 だが、これは誰かを殺すものだ。

井上 ご、ごめんなさい。

少年たち 僕たちもう殺したりするのいやです。

二十面相 乱歩は戦争に行かせたくなくて書かなかつたんじゃない。子供たちの命が奪われ続けたから。

君らの移し身たる少年たちを失ったから、その哀しみゆえに書けなかつたのだ。

結果として、乱歩は逃げたのだ。僕と同じだ。しっかりと向き合うことができなかつたのだ。

少年たち 先生！

二十面相 僕なんか先生じゃない。

光の中の明智小五郎。

明智

はい、明智探偵事務所！ええ私が明智小五郎です！

何ですって！あの二十面相が人を殺したって言うのですか！

まさか、そんなのデタラメですよ。

あの男はどんなに世間を騒がせても人殺しだけはしない。そんな男です。

だからそれは何かの間違いです。なに？ あの男の部下が誤って殺してしまったのだと、

ええ、それなら理解できます。いいや、どんな殺人であろうと殺人は殺人です。

それが国家であろうが二十面相であろうが。

ええ、捕まえてごらんにいれましょう！

教師 1

ちよつとだけ、昔話をします。昔話と言ってもほんの5年前のことですけれどね。みんなはまだ小学生、あの震災の頃のこと。たぶんみんなも覚えているあの頃のことです。原発が爆発してからというもの、学校も放射線との戦いでした。

あの年の5月ぐらいになると、校庭で体育をするしないの話になりましたね。

ああ、覚えていますか。そう、その頃です。

3、6マイクローシールベルト以下なら校庭での体育を再開することが国の指針として出されました。一部の体育の先生たちはそれに反対しました。

高校野球の開催に向けて球場の放射線量を下げるまでは開催しちゃダメだと踏ん張った先生もいました。

中庭の掃除を生徒にさせないと一人で掃除をしていた先生もいました。

小さな声を出し続けた先生たちです。その人たちはそれぞれに責任を取られました。彼らの行動がどれだけの効果であったのかはわかりません。

ただ、心優しくあろうとしたのだと思います。

さて、今年から18歳で選挙権が認められるようになります。

自分だけではない未来に関わることになるのです。

未来を大きく変えてしまうかもしれない大きな法律も変えていこうという議論の真っ最中です。皆さん。どうか自分の考えをもってください。気分には流されないでください。

まさに未来を創っていくのは皆なのです。未来でまた会いましょう。

どんなことがあっても生き抜いてください。では、さようなら。

プロローグ その2

教師1

日本がいつの間にか戦争をする国になっているなんて悪夢も見た。

ああ、息苦しい空気の底だ。

さあ早くあの夕暮れの教室で目覚めなければ。

あの子たちと芝居作りの途中なのだから。

夕空晴れて秋風吹き

月影落ちて鈴虫鳴く

思へば遠し故郷の空

ああ、我が父母いかにおはす